



群書類從
日記
伍

曾
775
213



僧
775
213

群書類従巻第三百廿四

檢校保己一集



日記部五

中智内侍日記

いさよあしつる次春秋いたむつこのあゆみか
心化してすゑのあまの常になんをさるるた月を
れろかき世をうろあひあうも得達のえんふはす
ま次ふか生く世にたまひぬへる人留れ八苦ある
そあまきしうたうる世れそりこくおとくまみえ
ますきりる中にも江安二年ゆみよの法せん法
とそ院の法るるをかりし小十ふおの月も宵

後深草

うら敬くせよむやうあるまじ野の巻れ家色物あり
まおれおるいふよみる人もかむらうありせんも
すらくくくうらぬへきこ八入てゆへぬるに伏見まよ流方
流りあふいてうせおるいふ流りもあめんのうれ
度内侍あれこころ八度中將はうりまの事お後
ま内々入祐ぬるを流りありぬるをあきハこか
おきてまいひするまよいふ物とやいひある流り
あふ流の月敷あきこまの中まよあ流りこふみえ
わたりて本くのこすあを流りみゆ沈のうみもあき
くらくきききれをうおくまをきゆたるやとよ流り
よみこありありをうれくあ川まりたるたえしくい

にまらあれをいひうりいふ新湯の松れをつま
れくみゆの粒を具守あきうあきうやくありふゆ流り
ありこきい井友の流りうりこはうりこ入てつ不流り
はちいさくわくこはうりこあるいふ流りおくを川
音の心地いおくり女院の流りこも流り流り
流りを流りんせうる新ありくこむくせうるこま流りの
君おとあきこもあてりまぬるあよりこまうかきよ流
川よけありまよいふまよをひてまゆまよの女房の
つ不流りもいふまよ流りありいふまよ流りておりし
まよいふもあきいふ流りありつるまよ流りんせ
うらまよいふまよいふまよ流りんせうら風と

とこころに安んずる四月十九日まゝのころのけり
ありて還津ありておるおらきまの世方を津門のか
将はりしはまもそ院の世方をまゝの世方にておる
せりしお後のまゝ橋ありなるこゝろありておる
しむ時きとやとまをせおるしむはあつくり
きもあつくりしむそのお友中將おふしむあ
まんとこりて久しきまのころのまゝの
あまねのしむと称をまゝやとこりしむあ
くもあつくりしむのしむのしむのしむのしむ
やとこりしむ

あつくりしむのしむのしむのしむのしむのしむ

とこころに安んずる四月十九日まゝのころのけり
ありて還津ありておるおらきまの世方を津門のか
将はりしはまもそ院の世方をまゝの世方にておる
せりしお後のまゝ橋ありなるこゝろありておる
しむ時きとやとまをせおるしむはあつくり
きもあつくりしむそのお友中將おふしむあ
まんとこりて久しきまのころのまゝの
あまねのしむと称をまゝやとこりしむあ
くもあつくりしむのしむのしむのしむのしむ
やとこりしむ

おさめつゝ さまのうけさ さまのれ 若くはあ
それかの 日影さくみの おひさや さまあひま
瀬 あうくいふ うみまー くらこむ
よきまきこいみと

肉付との女将よこはけ

町もあきみさうさあふ梅れ風つげさも人のとく
うりこ

りりりさきれにものもさなまじらぬれさよ白ふ花
廿日内侍あふ中將

いふあさんせふがすまきん橋の白ひもあうさけさあけと
正一人

橋れ白ひもたらふあさけさよこふいさきあひり
弘安七年三月十七日こきもあうさあひらあひり
沙あそひありあうさの女房四人あここ二人をとり
きいのあま入納と及まきんせいあさうつれまのこい
まらあけて沖和あひいあわれもあいのこ後うあひ
はくのあねあえあ門の女將ここよま次うあさひ
ともあるとい川りこいあうさあうれ金のたれ本
すあおりうく秋あう流もあひこむはり風と
けーさむのあうりいけふゆさともうみまか
ふりーくあふ流あさあうさあうさあう月あうあ
かくあふさあうりうさあの流とすみのあうり

ろくろのりともてまのふたありてこの世をゆく日
ありてはめんし一はあつと候もかきし一はいんちく
ちまきくもる村の村もつらりいそつらんやうなり
かろりかありともいぬいふるたなるんは
ちまきくもりむれむまのむしつらるん

とあきしうらむるついつら人もあきく八の中
あやおく神のぬらむら

とそおがえりいひひけぬきれぬおとうひあふ
地して

月影いづるむらむらひとそはわたりぬひかき
八月十日むらよりあつてあやむらあふんぬきは

月のあやふらし一出てをらつてのふもなるや一けし
よもあけあつたりたるん人そゆらりはりたりい
てみきハけあありてあはし一あきせもていつせお
りしき一ぬきともゆらりハ神のうらていづ一今と
あふみまひひみせんやうんのきりちあひせい
公地してあつたりあれ入るれ月山のふら
とふさなるも入るあきとらく公地していづ
のをいふさくゆ一あきとあやゆも入るあこの
あやそくともあふも一ぬ

八年八月十七日あひしつともあきぬきあきあ
あつる月といふはれ山端よんはりやふとあふん

又むねき八幡ふ入つらあましくんねさうんあらんさあふ
らまははーめいさそふあういさあまうしれたあり
らみろう心ねさういふゆいさうじさ物あり
あらんあふふのふ八幡ふの紫れすあがりうりふ
瀬川のあまそあらんゆ末をなれさふよすまおはする
先よりあふあまらえてもあけのすある月八幡を世
あまこいさ紫よそむんこあたるはうりこいさうある
世れそ海こいさもいさうにつけてもあまこいさあ
たあーもあーくしてまこいさあつあつあひひやま
あらんまゆうくあーささハクやこいさあまこいさ
いさせてらりたる花よつけて

あけさうしつらあんねこいさああふふあふふあふふ
よまはなだぬあけさあねらうあひあひあひあひあひ
みやこらうりてのらういほ

いささそいあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
あああああああああああああああああああああ
又大納言のゆつあねいほ

あまこいさあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
又三月廿日こいさあああああああああああああ
あひあひあひ

いほり暮らめん屋をけり日ねんそとたきとがふりよ
りりことと後

かゝりありをけぬきし一十年は年へまじり一冬のかうと
かねて先物人よきこととつたり物たかき物な
た月もつまたうき世ねんたしとけあけくかき
月日も屋へつねれた秋も物けゆとつたり物なわら
神もむしこれ時なわきみ後のあじやここのうあんき
たふ物りみありすけとをあらうつたかおた
あつた物りよとあらうと物くありひやなはりよ
てむきしとつねぬつりて

物あら神の海はらきこれのちあちかき物とつねむら

尾一六

ふあきえきつねむらとつたり神の海は色きつねし
又弘安七年はうきとあきあひつたあきつね
よとつたりあらあきつねとつたりあきつね
うきとあきつねとつたりあきつねとつたり
いそりしとつたりあきつねとつたりあきつね
はせねん人たあきつねとつたりあきつね
うきとあきつねとつたりあきつねとつたり
あきつねとつたりあきつねとつたりあきつね
たつねとつたりあきつねとつたりあきつね
すみとつねとつたりあきつねとつたりあきつね

と病めとハとこなる。物ハ山よりおろくる流の如き
ほりりそおと病うー不なるあはともおろしうたり
にありこ流もありハ神よりうても根ころせさいと
流さうー谷におろれあれをこまてもうりきこあは
神のよおろくる流れおまやとて山川のあ
せはまも入んこおのーおれおれ山の内れあ
ちりまおし液れまもひをかへひをかをぬおれはあ
たうひあさいむりーこおろそおろしねる。

七月廿日山家にひもいあは流うもなりーハま
くーそおあそひこありむらハ山然かこ不くハ
らんせうまそくうまハ流ぬふめくたつくおろりあ
よあまそわかるとまか

九日月ーいつるやうにまいたぬみはぬまはちん
ゆりぬーあそひくこむまゆーありーハ流りぬふ
やまうそせおろーまうーあーこゆみさーしんる
樂ありあま入もあひこゝあに樂てあは流とぬり
と吹あをせたるその種たそんこわかあり流
もろんこらさいそねるたすうにあつこさうつ
ゆりて入ーあをまていつくあーんこらまや
あーんそむじんのおみんかーらうーあにかじて
ゆーをたまハ火とここまめありたまふとらみ
ーくぬせさせぬふまあは流さる十日ハこらま

よやありらん 法良ももあふい 宗量元院のむすしえ
月以夜せしるをたこに花山院大納言家教をま友さあ
ひりよまましくおしりし物よりともありむん
うつよまの口よ大納言権大納言度さあひ
あふやそをれむんうのまおまみううらんよ
ふ月年相友と人さあふなまそあさ物よりま
しと物けりまいたこくたちうさわいのあし入
さあうくさあふさるる月れ池よ移じておし
ろさどころあうくハけふさころあうこれ月うけ
りある世まわすまうやあしひあせつて大い
のやうりううおひさいみるよりけりあてたあそし

くあらもあるあつともさひてかたりおわけよあう
へハ又えん年おこふおひりそあうくやな
りよふのうりに

ふけよあつむる月よあうありんやよおまおまううす
あけぬきハいせあひぬ

十の百もこの四方ハあるぬまをあさうまおれみそ
まさあけて月あうんせしるおんよんくさあひ
あふまこれ新お將清つのがんかしてまのせしる
都山院大納言家教笛をま友たいこけぬあし人ま
りりよハ月れあうりもこあうん板頭れまいて
うたやこハまこしおおしりわにかりおわくてこ

ておぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 汗より厚れたよりなれたの光物の人々へ
 まさけりしてせんゆるとりて

いづれにありあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 とくしとせしむるおぼせのあはれおぼせのあはれ
 もさけりあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 はずいおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 ろくしおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 あうしにすまおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 やとらりおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 ちたけとみおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ

らきいあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 ろひておぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 おぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 ろりておぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 ようしおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 さきいおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 すまおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 とくしおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 ろみおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 くおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ
 さきいおぼせのあはれおぼせのあはれおぼせのあはれ

しるしに月大のしるしに
わきあしるしにあしるしに
くあんせしるしに中しるしに
くおなうしるしに
人よいしるしに
なり十八日脚上しるしに
成上人圓座しるしに
むろひしるしに
りしるしに
らうかきしるしに
まもろうしるしに

しるしに月大のしるしに
わきあしるしにあしるしに
くあんせしるしに中しるしに
くおなうしるしに
人よいしるしに
なり十八日脚上しるしに
成上人圓座しるしに
むろひしるしに
りしるしに
らうかきしるしに
まもろうしるしに

こゝにやあつてさうやくと堂れ也あかた
うらふおようりりひたるやとせりうくくぬ月じ
いとぬまひまゝのやとなるよ漕まゝすあ松のうち
れとえんたちさうくあぢれりさうかろつねの本
末物こゝおりうらうらうらうらうらあさうも又うら
こゝしうらうらせうらうらうらうらうらあさひ
もそぬまひまゝの田じぬ月さうんせうらうらま
ぬまゝの八段をこゝにぬまひまゝのうらうらあさひあ
うらうらせうらうらうらうらうらうらあさひあ
たらにあああああああああああああああああ
ぬまゝのうらうらうらうらうらうらうらあさひあ

光のたまをあつてさうやくと堂れ也あかた
あつてのうらうらうらうらうらうらあさひあ
うらうらあひぬれぬらうらうらうらあさひあ
さうらうらうらうらうらうらうらあさひあ
松の本だらうらうらうらうらうらあさひあ
羽うらうらうらうらうらうらうらあさひあ
みまゝのうらうらうらうらうらうらあさひあ
うらうらあつてさうやくと堂れ也あかた
うらうらうらうらうらうらうらあさひあ
うらうらうらうらうらうらうらあさひあ
あつてのうらうらうらうらうらうらあさひあ
うらうらうらうらうらうらうらあさひあ

ゆく有るの氣なりあつたさうあるわいけののさ
くて心かこくわしたつるさく入ねまゝ

栞雲がその波ゆく有ねと心かこくもなつたさ
去れたのめちをねかか風ふあむくさくかかたふく
かやうなつてぬこたつて心の中にあつたさく野み
より還沖ありてあけねはけはねあつてあけさて
ぬまへ入せまひてやうそそのまへへはくさつありぬ
かゝぬすまへくさつてさうさうちねの時もおくそ
あまひあひねる。

廿一日八還沖なり院のさくさくさくさくありぬま
出かよりありぬ月まじりぬさめはぬ月にてぬまへ
即よりいせおさうさくさくさくさくさくさくさくさく
ゆけぬまへ還沖なるさめよりぬま地まへあけぬまへ
やふよてさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
わりかよりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
うくく目教つるさくさく八月もありぬありさく
ゆめおれさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

今かろむくも猶まじりさくさくのさくさくのあけぬ
沙也

今かろむくもさくさくさくさくさくさくさくさく
あさきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

おしりくちやあや〜〜にあふ〜〜のうあ〜〜あ〜〜と
〜〜とあふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と
あふよは秋〜〜衣のき〜〜のうあ〜〜と

みおせくりふあんとすくらにいまきんむー 神あまを
いひーうりーいもいまわくありぬるあたまにわかき
りーい物よりするそのあまに

あまわいぬまはるいとあまのあせは川は神をぬきぬる
よりてのちあらしきなりーいさむとあーくもりすき
かこい流るより人ーいしみありよりたそいあまを
くら地あやまーくして日教つてあまはうてよほらかく
もらあまーいりくうれせは風いもそまんおくあぶ
と心をそくおまゆるうあまにありーいよま
まーいもーいあーいかーいーい流るにあま
いよまーいーいあーいおまよりあまーいあまーい

うまの秋の色はあまもよあまのあまにさうあり
いりありぬーいいさむいあまはあまのあまにさ
あまあま

花をたれよも神もあまのあまにありあまを
りりいもいおれーいあまのあまもあまのあまにさ
くたそあまをとおいーいあまもあまにさ
あまのあまもあまのあまにさあまのあまにさ
かりそあまのあまにさあまのあまにさあまのあまにさ
あまのあまにさあまのあまにさあまのあまにさ
あまのあまにさあまのあまにさあまのあまにさ
あまのあまにさあまのあまにさあまのあまにさ
ういあまのあまにさあまのあまにさあまのあまにさ

おしくおなゆふふあはれいなりはすなはるうとよをみ
るもあうくをる公地して大納言及ねようけて
月とすじき井はねとよもなとあまうきあはれ
沙をうすく

そふかやひのふいひとねとねあはれい
花ゆふやみあはれいりくき世のいふた
おふ花してふいひ入も月とみるもあはれい
おしくけううあておあえあ

おまの月をふす物とあまのあやあひあす
猶ほおくたふれいあはれいあはれいあはれい
おしくけううあ

まの月をふす物とあまのあやあひあす
いふあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

そのあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい
あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

さゆくよあふをて取ててうやまうてく候おちか
有る日おわりのむてふ茶殿へ十日御幸の由り候
と川へ入おくさむてぬるをやなるみまよま
むらうのひんまはたあけてゆらん〜
ゆまよ大納言殿はわうさう〜ひるふまはた〜なちひ
てみまよ池のひんま〜むらう〜あうり〜る者た
みらあ孫のあうり〜むらう〜あうり〜る者た
あまよはらうあや〜くあまよ〜

さうあひ〜まよふあまよはらう〜むらう〜あうり〜る者た
くまあまよ〜ら〜せあひ〜むらう〜あうり〜る者た
にまて入あひ〜の〜あまよ〜ら〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜

とやび〜さう〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
うやあまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
とあまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
行のあまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜

七月二日おく〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
ま〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
のあまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜
うあひ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜あまよ〜

よし條の二後以矣すけらに取と人ともいふあり
―た免さ終るなり

あつむり年とうきぬきいまのいふのまうきより花
郎は月夜につけて公とのあるおこもみもさけり
ありとももあわげさう―うらまはきて物ま
わりなとのむより山とあさうとあさきいさうとあせ
わくえあひひさうと―いさういさうのあすあもゆ
―くといさういさういさうとあん玄暉と門院のけ本
衣笠庵へ九月十日にまのりなまへ人へあやぐせり
わう院の山とさうのいさうとけいふ時あうらさ
風すこ―物さそやう―木すあもあつこころのま

あああとなりく物あらき―みるるにわさ―るせ
やのあふんき―いさ―あさうとあさ―とわら―く
う―とあさのむのうらうらみさそ―をに持る
又あつるあまのうら―あさ―あさ―月よみさ
てさあ―とさるみ―あも―あさ―地―とさる
人のすいあ―とさ―む―のあ―いせとさ人
まていまいさ―さあ―すみ―た―あさ
まさりて

振沙る賊うかきた夕影を公とあてす―あさ
疾のあもあさ―あやれささ―た―あさ
おさ―とさ―けりまは中將日あさ―いさ

不のしくいあくるに川霧かすちては
まのえらありたりめみそしらあひらう
川霧にたそをえぬ小車れまりては
うらあさなりとくよあをみまはし
くもくのりみらとみえりりあひら
くおちぬ

おのころのしむきあひあひら
まのえらありたりめみそしらあひら
あ車小みりれりりりりりりりりり
やうありきつじ舟とありつみえりり
くかきんくすりもあり

おのころのしむきあひあひら
牛等院とみまは極系乃^莊あ^巖うんゆ
いゆりもはりりりりりりりりりりり
くくくくくくくくくくくくくくく
とくふたのしむきあひあひら
あそふあふそいりりりりりりりり
池あもあひの風はむむむむむむむ
春日ふまのりつとてあありりりり
へて麻のあひらりりりりりりりり
春日野ハ麻のあひら箱板て萩のあ

めきとて東よりつひあまのちもあらはれありしに
いそぐトよりするたふいふとさうあらはれし
ころおがしころいひとさうあらはれし
さうとて杖の本にわとつつけいふとあせし
年月のゆきもあつてすきしころふゆきみ
る川よりけむ杖のまはれありしころむらひて
く頼ありてあまのちもあらはれし
あまのちもあらはれし杖のまはれありし
又た戸の弁しりふあつていふやあまのちも
くみとてさう
くみとてさうあらはれし杖のまはれありし

あつて日ハ東へくみとてさうあらはれし
まうけたまはハやとてさうあらはれし
廿一日節舎とてあまのちもあらはれし
たつち幸れしころいふやあまのちもあらはれし
赤飯ハ右道中將むねさうとてさうあらはれし
基
そやとてさういふ郷依もた右大將とてさうあらはれし
んしころいふやあまのちもあらはれし
は中門のまはれとてさうあらはれし
はしころいふやあまのちもあらはれし
トにたつち母をのまはれとてさうあらはれし
赤飯とてさういふとてさうあらはれし

清もんとうけつるつきの團とては次太より中將
内侍團とてけりあるまよゆりてりてた
とくききよぶ久くくしてあるややくも内侍の
いせりふのそそぬまは清せんもせん問あかきか
内堅ゆとまをそそり次

二日ハおのこも解とあつきて大とんとこあふ年中
りまのあやうしおとまよおしありてふいしくいん
せりるやくそらん解津ちんあり中門しおしあり

十月九日よりまれ中ねまあきおくありぬまはへ
よをとうけて今一とひく願せんもな事かより志
ちまももりありあるせはあひなりちまはふか

まう移んのあはまふらぬこもこもいよとのまこ
思ひさう奉おとといひしよとま

九日ハ春日まつり小内侍勾當あり

十六日まつりこもはけり

十七日解齋いの清まつり

十二月六日見んのまつりありつひハ花山院宰相
中將定教せいやく師志あきちんの清まつり
つひハおとまね清兼師志敏下つひありあり
中神馬おとまねつひまつりては毎いよまは清まつり
ありてりせまひていし小清ありけきせまふ
つひ舞人とも度まつり中門のトハも郷つきまつり

八日九日ハちとくあり

十月十二日神元ちたれはひし川をうけの権大納言
兵部大納言宰相より延たあれてとりあや
くにあつふこくもあつたあまひのやうふあり
さこくもなり

十六日内侍和神樂おまれ中よあむこくあり
たるふとらんよまんせいのゆたよりあつてむむやう
二条中将をけらす急のむやう一後少将のぬ信
ありむちのうと山とこれ中將のゆた笛はくれ新
少将や次あり月をゆけゆくまにゆえとるに日教へ
てゆりつみこる言にうゆりまふこく池のあつた

松の木す急あまのこす急うゆこくもを大ゆけ
よそをきまのくろさううゆりあつた言うらな
らあとりこくこくすみ神うひるうこくさ
まか一急あむこくそ芳作のへたゆこく
なれまハこくそとりて中門の下よそあり

寶兼

廿五日ハ山よのこくこくのゆ幸けめなり又言
ゆりて月たふあつてあつた一常ん一のやく花山
院宰相中おくれ内侍向高内侍新内侍ありす
け小権大納言のまけあせり角少将内侍とる角よ
うけのゆあつたゆりてむひてこくこくこくこく
みあけてとやのゆそのうらよこくこくこくこく

せきさかへりぬ入沖ありぬとハ沖装束けむさかどりぬ
しうて月もあきこみぬとハ角上人もあそくこして
あつらんせむるのせむふてぬらんありあつらんハ
尾中ぬ為兼ぬらんありけいこのすらんまきり
らんしやあしくみぬ大納言のそけ角新入お慶
如房と入おとこ入うすふとまぬお祝あつらんし
うらんおおゆき還沖まわのしくとあくらわらんあり
ぬきハ若うらけいふけいこぬとらんしやあし
おりしわくみらん

遊義門院

女六日伊原あつらんしやあしぬらん人きくても休たむむ
こまのりたきハ還沖まわのしくとあくらわらんあり
てつらんしやあしぬらんしやあしぬらんしやあしぬらん
よりらんまもたりしやあしぬらんしやあしぬらんしやあしぬらん
いまハ秋うそたのみあつらんしやあしぬらんしやあしぬらん

まきぬと唐うらにいそをうむに秋とたの免てそめ
弘安十一年二月六日ま日まつりふた川しやうけいハ
糸大納言兼仲ふハぬらんしやあしぬらんしやあしぬらんしやあしぬらん
たらたあ川のもいそゆけハ橋ありあつらんしやあしぬらん
わらんしやあしぬらんしやあしぬらん

十日そのらんかみのまつりあやうけい大井の山門の大
納言為俊ふハぬらんしやあしぬらんしやあしぬらん

十二日大京のまつりありぬらんしやあしぬらんしやあしぬらん

みねさしめりし〜川おとつふこ
ころもすきそめ〜

心がとくつねあふひとあふせ〜こまや日れかしの栄
みねさしめりし〜川おとつふこ
をいあふ木丁〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
た〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
ら〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
目〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
るも〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
う〜みえつら〜みえりつら〜川もありぬらぬ
福も二ふあり橋の下りやうそ〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖

つあてむ〜やう〜人物〜はらりつあをむき〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
あり〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖

わ〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
日湯〜みえりつら〜川もありぬらぬ
空居〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
よ〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
中待の松の〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
ま〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖
う〜しきそめ〜しけま〜まのりてみま〜河津の沖

くろあけのきつうと粟れぬや池のうまね松のあつえよ
くふ十目あきハさうあひ八溝とて沖幸あきハいそら
還沖あきそねちくくやふ野とへゆ幸なるへく
さふふありてありつるやうふあん道あねく角と入
六佐ありありつるといそらさうりてなほよとらうと
してやぬ人の念もんのすけせさ赤衣丹れきこころ
しきふとねはるあを色とてきしつるさうり野ありよ
うらとありける女房元の中よふもんさうれさうなる
秋のをみるよとこいまれぬりやたつらんこあひ
うくとみゆるきあれ沖時もありたりうあひい
てうきとてね山の中あきハさう若れ秋ようりう次

うけむのそとと松の松のま色うさうけしめさうい
よすうきうけさうしてすしけあつた月さやう
くさうとてこのそとふて沖とねまのころあうくもん
は角と入ともハさうけてあきハあひさうゆせん
ますきたるさふとさうさおさうさう

あひむの若れ秋もあきハいれなまなまはしりせし
心の中ふとてうさみあつるあつともあつる目さけけん
よ入けるやそと山あつたさうせし
二月廿七日らんれちやうのゆ幸ふみあけれ内待句
當とが内あひあり
三月八日あつとくあきハあつとらうさうあきと

そうあよをとりてあくるまを秘伝のつくすとすうに
ゆふの花んといひて大納言権大納言をけとの
新がね角は人ほり殿といふ此の花とみまはさうり
ありもありすこしあるもゆりこころい風やゆぬ
花やさありとみえてむしうありぬといひ

九重の風よきそや物さすくら盛久くくみぬ花は
八日八日ひさしん

九日九日一のまわりはひよまの花もさうりなる
は風すこし吹てありまふ花はゆふまひ人も
あにうきたらんやうなりたりまふ神の宗文津う
きしおのひやうまて

積んたる世れりめ小候ゆふ花のこころといひみらん
三月廿一日礼殿ゆらん目の出度ま出津あくせりふ津む
さかると母屋れ津せとるこなるけのり次とあ
けてすれこ小糸をとあく関白大后のいあ川忠ん
さそのおのふゆのいり次忠んさありまのり六後の職
事あさよ六位ありわいふゆい実白内侍を返こ
此右大將通基のおやいの出門大納言守屋文権守又角
守りゆらんをそりつせりふおふのまよそゆらんあり
角下おやわのゆりて大納言守屋文権をま殿あし
らるよとくゆらんありてこれひひりあひらきん
するいめしとあつまぬ其がいらひくさういり

とさうもして内侍り一は本のかじれたういさ
めくぬきのうち大あやういれむんういふむくさ
まはむさふうけん二枚のういよあしねよきひ
てこのよそまはれむせんおまのく次はえいせ
んハ女房やくさうれ神ういこよらうあいた
本のかじさふふきゆふまのあさうと免
してたうくられゆいらくさるかとおあせといさ
まハあさううりあうてくさうさうさうきむ
らあさのかじさふてはそくたういんくけさむお
ういすしてむはむさううめいさういあぐめい
まて大あやういふまういせおんうゆたなま

のむさうゆりふあけのをくつあけのむさうふた
本のかじさふ月と日ととりいむさういふむく
と七星をあさううなてまのむむ神ゆ神ま
あつのがつさるとねひさうあささちれむうの
さうまのういよらういあくのむ家とめ次をれよい
大をそれゆはうとめ次はくひういさまひとあり
そのういうたうひのむ神のむさうとめ次こ
の色くのけきんハむ神のむさうふあうて
ういふりうあうられ神のむさういんかうい
れかうのむいあうられういたまをつみさうい
こいハむいゆとむとああさとむをたう

た本のいづし流のいづしこのいづしよたんしゆとて
二すりいよどりのいづしをいづしういづし人のた
あはれいづしいづしいづしをいづしつうねにえつけ
らまてりいづしをいづしうらうらうめねとつけ
らまてりいづし人のいづしふいづしめいづしせ
まふいづしよいづしめいづしひをいづしたりたり
のいづしをいづしいづしひをいづしたりたりらの
ゆりういづしよいづしめいづしハやういづしあり
流銀ハいづし流のいづしれやいづし本のいづしふ
まのいづしれいづしをいづしありいづしいづしふ
うけいづしめいづしひをいづしけいづしいづしありいづしあり

やまらいづしねをいづしおんせあるいづしがうけのいづし
ふとつういづしあはれいづしをいづしあやまらありたり
いづしいづしいづしあはれいづしつうねいづしありあけの
いづしはくのとていづしのいづしめをいづしやういづし入いづし
いづしくのいづし入いづしういづしをいづしこれいづしめいづし
いづしなりいづしいづしあはれいづしをいづし命帰いづし
いづしいづしそのいづしあはれいづしあけのいづし二人いづし
あはれいづしあるいづしあはれいづしいづしあはれいづし
いづしいづしあはれいづし入いづしあはれいづしあはれいづし
たのいづしあはれいづしあはれいづしあはれいづしあはれいづし
あはれいづしあはれいづしあはれいづしあはれいづしあはれいづし

侍のさへつさぬ女王の志やうそく二色これかお
のひと色そくしれうしきあり色のあつさぬ
かみあけの内侍八句あくとく新内侍あり清せん
の命婦

みあきの 川ぬさ 美人 いしそ

いざれ命婦

はく末 さぬに 正せん なまうさ

らまみかうううにそくやあさううう衣なり
こそうの命婦

右衛門 若殿 やあはふんきかわれむく
うううのううに

新内侍 若殿 とえきふんきあ井のむく
うううのううに

新宰相殿

あううにれうあやふあうういん
かううにのうういんううのうう

宮内卿殿

新宰相よおなり

治部卿殿

あううにれうあやふあうういん
えいそくのううに

少将内侍 若殿

まううにれうあやふあうういん
やあはのううに

つねの衣はうううのふおわううさぬうけつ
衣のひそいあり

さううま川のあつこの事

みさうにいたる命婦四人 あんうの
たふう

あやうちやうれたまう

つさおん一の内侍二人 たうう
たうう

こそうれ女房うううあゆみううにういぬこと

らんおのいふ〜おののんて池のふら〜なる花
れは小月のうがのこまわ〜きてあけ〜あつよ大納言
多〜ころせあ〜てとさひいつ〜んや〜てあま〜

月よさひ花はうてあつあるとさ〜る表あの人とありたり
つと知て大納言

年とてさふとあ〜次〜〜〜〜
沖〜

表とてか〜ぬ花れあき〜さ〜み〜世のな〜あ〜め
い川そ〜表いたを〜ありありわす〜いひあ〜出〜記
二月廿六日雲井の花ふかり〜てあはよ表日角〜
あみろまのりたるはた〜ふ花とまの〜わ〜り〜

かおよあちい〜た枝とあり〜てこ〜つけゆ〜よ
せ〜ありわ〜こ〜病あき〜い〜川〜れよりとめつ〜
〜とあ〜あ〜り〜〜ぬ〜と〜〜〜
あつまぬ花のちけり〜い〜か〜ら〜こ〜あ〜は〜あ〜
おやえて花のう〜り〜

あひまやまきなるころれ花君をか〜けと〜てみ〜や〜
いたつ〜小教かん花とあ〜ま〜〜い〜ま〜へ〜枝〜み〜よ〜
又た〜

あて候〜あ〜あ〜八橋花わ〜り〜と〜紫れ色と〜
百風小花いあかな〜敬希ぬい〜か〜き枝と〜み〜み〜
四月十九日まのりありは〜ひ〜一〜条中ね〜糸つ〜れあ〜ん

留居あれつひは一ゆり

有月軒れあやをたもあつひあつししたちふゆり
なりあやうゆりしあつひあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり

有月八日むしきたれあつししたちふゆり

はげしきあつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり

九月八日小月月のしきあつししたちふゆり

有月十日有月月のしきあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり

六月二日女沖まつり

有月有月あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり

六月六日沖のあつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり
あつししたちふゆりあつししたちふゆり

あつししたちふゆりあつししたちふゆり

とてあもれくもおろきしハ

すてふ秋ある公比こそきき

とほけしとと新宰相殿のころりきんあるよりしん

さよかんせきせりふい

おあーさ七日人の津より舟中よりれおあー

仁治のまゝのまゝよぬきたるぬもせきし

いあしといまはたあるまれはぬさうなるな

とて

そあまるとはふあるまれはぬさうけし時とたうぬ

六月十六日月さう出てさうはむさうらして

とすもさうありうかありは花山院中絶たもあて

せいのあうあよしてきせりひて月さうんせきし

権をまのりあひてあふのりゆんしゆあふあ

大らん和の物もたしとあふのせしとと院の宰相

お中ねもまのりそやそあふまのりて我人たあつ

のりあてむらつとと権をまあやれあえ花山院よ

あえいしおとし

おあーさ廿七日新まれせんしとらその日あ盤井と

のりあひあへあさしとに女房さうあさのりあ

ありいしあ人をあまてあ果やうあふああいのい

つりあてまのりてみらしとらに女中のだてあ

あやあふ殿のありしとととハ花さうてす

とせいのこのやいふ... せいのこのやいふ...
せいのこのやいふ... せいのこのやいふ...
よりみえ... せいのこのやいふ...
このよのあつて... せいのこのやいふ...
心もあがり...

おりのあつて... せいのこのやいふ...
まののま... せいのこのやいふ...

七月七日院の... せいのこのやいふ...
夕方... せいのこのやいふ...
うす... せいのこのやいふ...
このよ...

とせいのこのやいふ...

たのこのやいふ... せいのこのやいふ...
とせいのこのやいふ... せいのこのやいふ...
い...

け... せいのこのやいふ...
ま... せいのこのやいふ...

くれおき... せいのこのやいふ...
ま... せいのこのやいふ...
中將あり... せいのこのやいふ...
おのこのやいふ...

とせいのこのやいふ... せいのこのやいふ...

けははちたらのふも向をくむねを参小孫のやうかゝん
なむけするそくなきあふいはりあまたあらも神あらん
権大納言まのせりよてあうらあり前大納言むむし
あはハ常侍のうされ権大かえん友どう院の宰相中將
あえ花山院中納言友はれお將中納言ありむやう
あやのあゆのが將ゆうくそねんの中あ川まうまを
月えんとしひて女侍のうさふあひてむむむむせりふ
七月十九日くらんのちやうれゆ幸なり

女一日の常侍のゆ幸公侍の内侍お將お補内侍なり
女に取のかいむまふいのかうそく向あうくまむし
余婦四人伯耆まかちらゆせんむせん養人よみあま

のまむつる法陽きうそくた何うくそくそくれ
二衣あまむむく嶺けられまむしけうまむしむし
のきぬこのもたらちりつまをむしそくくりんの
く同そくたてくみあけてむむたのうてくそくそく
くりやままんむむむた常侍のいぐるまむしむしむし
いそくそくまむくくみえそむんでうさう車
まふそくそくたむたのむむくくくめりみちあ
めん

閑院あゝあまにけりけ七らんあられまハ院のい
たはま屋文れいそくそくきみちりき孫のむしむし
みゆい取のあうむしむしむしむしむしむしむし

てきり〜二人〜たりはす〜のまに〜い〜ん〜の
大納言のつをぬよゑの〜おかりや〜な〜人〜もち
やくはち〜うそのまの〜おもて〜おすのめわ〜う〜ん〜
とみち〜う〜て〜い〜ん〜ま〜お〜ん〜い〜ん〜い〜ん〜
か〜す〜さ〜ぬま〜みち〜より〜お〜り〜て〜く〜ら〜海〜〜あ〜ま〜み
や〜ま〜の〜お〜さ〜く〜松〜栲〜〜り〜ま〜と〜よ〜う〜よ〜ふ〜め〜て〜は〜
ア〜の〜い〜あ〜ら〜り〜ん〜沖〜お〜り〜て〜後〜十〜二〜日〜その〜た〜ひ〜お〜の
お〜り〜つ〜り〜〜久〜〜の〜〜い〜お〜り〜あ〜〜あ〜り〜お〜い〜ん〜い〜ん〜
そのお〜り〜よ〜て〜あり

十月を大〜や〜い〜な〜て〜あ〜も〜月〜八〜日〜女〜工〜取〜は〜め〜て
ゆ〜い〜さ〜い〜あ〜な〜さ〜て〜つ〜い〜ん〜い〜ん〜い〜ん〜い〜ん〜い〜ん〜
よ〜六〜神〜さ〜く〜り〜ん〜を〜の〜ら〜わ〜〜〜〜や〜あ〜も〜〜よ〜六〜陸〜陽
ま〜う〜ち〜り

八日月〜〜い〜つ〜る〜お〜た〜〜い〜な〜う〜〜い〜ん〜の〜ま〜ふ〜て〜ゆ〜
夕〜た〜く〜秋〜の〜さ〜し〜に〜氣〜代〜の〜け〜ら〜〜い〜ん〜六〜神〜の
節〜よ〜さ〜ら〜る〜物〜な〜〜み〜え〜〜る〜も〜あ〜ら〜〜い〜ん〜い〜ん〜

霜抜の野〜か〜あ〜ま〜は〜は〜〜い〜ん〜海〜を〜お〜月〜持〜て〜す〜ひ
ゆ〜て〜月〜入〜て〜の〜ら〜〜る〜女〜工〜取〜に〜く〜縁〜て〜十〜二〜日〜を〜あ〜り〜し
〜い〜ん〜を〜そ〜く〜は〜ら〜り〜い〜ん〜は〜よ〜十〜七〜日〜より〜入〜よ〜ま〜う〜ち〜り
あ〜も〜こ〜ら〜り〜た〜る〜夜〜れ〜〜い〜ん〜に〜れ〜す〜い〜ん〜六〜陸〜陽〜ま〜い〜れ
あ〜ら〜あ〜ら〜た〜や〜り〜の〜い〜ん〜を〜む〜ら〜ら〜よ〜み〜い〜〜い〜ん〜な〜ら〜
を〜神〜さ〜く〜り〜ん〜の〜つ〜ら〜〜い〜ん〜東〜よ〜女〜工〜取〜お〜や〜を〜た〜ら〜る〜ふ

りりふふあゝる事れはむらゝみものこゝちりき
るくはらうかくきまそのこゝちりきしうきし
ありあゝこゝちはあゝる事れはむらゝみものこゝちりき

君あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき

御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき

御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき

御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき
御事あゝる事れはむらゝみものこゝちりき

てはしきりぬを祿まみのわりて宗^玄ん^上やうの
ららとてあまのむすこのわりてとらんの
すゑのむやうふあをせうさかひおり^りや
うふ物^實のむ^清り^りあやもどろりこ八をり
あまうたる^實祿^清うたれ二位の壽は危む^りや
おやも^りさく^りはんをさく^りはあ^りと^りす^りなる^り
山とらん^りやうの^りや^りと^りあ^りと^りあ^りと^り
か^りく^りた^りあ^りゆ^りく^りあ^りく^りあ^りく^りあ^りく^り
神にさん^りと^りふ^りち^りう^りさ^りま^りい^りあ^りあ^りあ^りあ^りん^り
おんを^りて^り心^りの^りう^りり^り

神のついでに

神にさん^りと^りふ^りち^りう^りさ^りま^りい^りあ^りあ^りあ^りあ^りん^り
おんを^りて^り心^りの^りう^りり^り
すゑのむやうふあをせうさかひおり^りや
うふ物^實のむ^清り^りあやもどろりこ八をり
あまうたる^實祿^清うたれ二位の壽は危む^りや
おやも^りさく^りはんをさく^りはあ^りと^りす^りなる^り
山とらん^りやうの^りや^りと^りあ^りと^りあ^りと^り
か^りく^りた^りあ^りゆ^りく^りあ^りく^りあ^りく^りあ^りく^り
神にさん^りと^りふ^りち^りう^りさ^りま^りい^りあ^りあ^りあ^りあ^りん^り
おんを^りて^り心^りの^りう^りり^り

君を世ふわるえは是る神の心もあひのこして
こははてぬきいあひつらりぬつおてふちこ入
らるるこしてあひつらりつらぬ

三月九日秋せいのあひつらりつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
あひつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
おらつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
よけせおらつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
こく女孀め火をけちてえん上やうつらぬつらぬつらぬ
せいささらりつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
入らんつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

みりよあひつらりせえんそのちりつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
けつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
こつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
のんつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

十九日あひつらりつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

おらつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

君のくさる末末とていつか花の色もゆかり
後の花ふきして

念またなれたるもていふ花の色もゆかり
みか人のかりて末末のゆかりをいふ

君よりてちじと花やあんなにさけおちあつた
大綱と度さうも本にほけて

わてみる人のなれおさけよりみれば花の色もゆかり
又中つて

あひまやまのちの極花は一枝をほてみんと
いふまにみれば花の色もゆかり花の色もゆかり
一枝とかりてみれば極花はいつかゆかりとす

は花と一ふあつた人ゆかりのゆかり
入ておか

東路のみら花はゆかりのゆかり
花

いまあつた花はゆかりのゆかり
二月廿日衆のゆかり
せうくたのゆかりのゆかり
みかふ花のゆかりのゆかり
ゆかりのゆかりのゆかり

物こゝろ花はゆかりのゆかり
あつた日せいのゆかりのゆかり

とみまゝの風は花はあゝ〜いかりりてすたふふり
くりり〜

よ〜もはふく風ふあわ〜とてね端の揺りり〜をふり

大納言殿

かり〜もあまを教はの由風ようたそも春はすあま〜あぬる
四月十四日松尾した月がなぬ〜にあふひと〜と〜と〜
よいもかそあ〜と〜あふひ〜あ〜り〜り〜と〜あは〜り〜め
り〜〜〜あや〜を〜

待ま〜〜その神山のあふひま〜人あ〜は〜れ〜れ〜と〜あ〜り〜り
大納言殿のゆはりね〜ま〜り〜ひ〜あ〜り〜と〜〜〜ま〜部〜の
あ〜ゆ〜り〜つ〜ひ〜〜あ〜ま〜〜と〜あ〜り〜と〜〜と〜

い〜ま〜か〜ん〜ぞ〜と〜〜〜と〜部〜と〜〜と〜り〜つ〜ひ〜
ゆは〜

君うあ〜ま〜つ〜ひ〜あ〜り〜と〜時〜と〜〜と〜あ〜り〜と〜
い〜ふ〜〜あ〜ま〜〜と〜〜と〜ひ〜親〜つ〜〜と〜あ〜り〜と〜
あ〜ゆ〜り〜と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜
やゆひ〜ま〜つ〜ひ〜〜と〜〜と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜

と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜あ〜り〜と〜
と〜

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

あつちとていふことありてはふし月はこころよりなる
ふかふかといけり新宰相友

ちのちたふらの社かけるまゝいん春もあぬ奴か
た

こころの報せ風といふこといふたりの力を

いふこといふ

右中務内侍日記収束拾葉集校合

文政十二庚寅冬十月廿六日於砥用郷家之 中村直道

群書類従巻第百廿四

